



良く知られているように、久坂玄瑞と文との間には子供は生まれなかった。実質2ヶ月とも言われる文との新婚生活では無理だったのかもしれない。もともと玄瑞は「文の容姿を気に入らなかったものの、杉家の家風の下で育てられた文の性格を考えて師の勧めを受けた」とも言われており、無理からぬことだろう。しかし、その後の下関事件、8.18の政変、そして禁門の変、と目まぐるしく変わる政治状況の中で頭角を現して

尊皇攘夷に奔走する玄瑞は、ある意味自由になっていくのである。身の丈六尺の美丈夫と言われた玄瑞である。彼が詩を吟じながら京都の鴨川を行くと「長州の久坂はん」と京の芸妓たちはもてはやし、放っておかなかったという。そして、その誰かと懇ろな仲になっても何の不思議もないのである。秀次郎は生まれて5年後の明治2年に玄瑞の遺児として認められ、久坂家に入籍している。しかし、実際に家督を相続するのは15歳となった明治12年のことであり、史料には「東京市本所区松井町居住の士族・久坂道明の養子となり・・・」とあるので、久坂家の養子としてすでに家督を相続していた楢取素彦の次男・道明(久米次郎)の更なる養子という形を取ったとも考えられる。5歳の秀次郎を11歳の道明が迎えた格好になるわけだ。しかし、11歳に子供が養えるはずはない。では一体誰が養育したのだろうか。実のところ、これは良くは分からない。他の文献では、「兵庫県令を勤めていた伊藤博文の許に預けられ、そこで養育された」ともある。「えっ？」と思ってしまおうが、これはかなり説得力のある説と言える。というのも、秀次郎の長男誠一が大正13年10月に30歳で結婚する際の媒酌人は、伊藤博文の長男文吉が勤めているからである。媒酌人をお願いできるのだから伊藤家とかなり強い関係があったと考えて良いだろう。また伊藤博文自身が松下村塾の先輩として玄瑞を敬う気概を持っていたらうし、その気持ちは当然遺児にも向けられても一向に不思議はないからでもある。秀次郎の戸籍を辿ると、明治24年10月に徳佐の椿酒屋に転籍している。理由は不明。なお今に残る久坂玄瑞の肖像画は、一説にはこの秀次郎を元にして描かれたものだとされている。イケメンと言われた玄瑞と京都の芸子との間にできた子供であるのだからイケメンでないはずがない。その説には素直に頷ける。ともあれ、久坂の実子秀次郎と、久坂の養子・道明(久米次郎)とは、互いに知らぬうちに明治25年に台湾に行くことになる。翌年、道明は台湾にて排日運動に巻き込まれて惨殺され、秀次郎は、その後帰国して昭和7年東京にて病没。久坂道明の墓は萩市東光寺にある。(2024.5.26 記)

**イラストでたどる石州街道㊿ 脇本陣 旧椿酒屋**

前回の椿家の手前反対側に、本陣をサボリする脇本陣、旧椿酒屋がある。実はこの家は幕末の志士・久坂玄瑞とかなり深い関係がある。当時の当主椿又三は、久坂の母の実家である生雲の庄屋・大谷家とは親戚だった。久坂は松陰の妹・文と結婚しているが京に愛人・辰路がいた。二人の間に生まれ久坂秀次郎は五歳まで辰路が育てるが、久坂の死後彼女は藩に訴えて秀次郎は実上認められ、久坂家を継ぐこととなる。当時の世の常とはいえ、それを知った文の心中や如何に。秀次郎は成人するまで椿酒屋で養育されたが、それを具体的に示す史料は残っていないようだ。大河ドラマ『花燃ゆ』に辰路が登場したのはさすがに驚いたものである。

文イラストⅡ 古谷眞之助